発見「かわいい土木」：前編

土木と観光が出合うとき

三上　美絵（みかみ　みえ）
フリーライター

大成建設広報部勤務を経て、1997年からフリーライター。主な分野は土木・建築。土木学会土木広報戦略会議委員、広報研修講師。著書「土木の広報～『対話』でよみがえる誇りとやりがい」（日経BP刊、共著）他

スケールの大きさだけではない土木の魅力

私は現在、一般財団法人建設業振興基金の広報誌に「かわいい土木」と題する連載記事を書いている。幕末から明治にかけて日本が近代化していく過程で寄与した産業遺構「近代化遺産」のうち、土木構造物を「土木遺産」と呼ぶ。その中から、かわいいと思うものを１件ずつ紹介する内容だ。

といっても、「土木」が「かわいい」とはどういうことか、と首をかしげる方もいらっしゃるかもしれない。たしかに一般的には、ダムや橋といった土木構造物は、重厚長大で威風堂々としたスケールの大きさが魅力とされることが多い。

ただ、それだけが土木ではない。むしろ私が惹かれるのは、機能とは無関係に美しい意匠を施された配水塔や、深いシワを刻みながら100年近く現役でいる日本最古のアスファルト舗装や、地元の人々の井戸端会議の場にもなっている屋根付きの木橋などだ。

現在のような大型の建設重機がなく、労働力の多くを人力や牛・馬の力に頼るしかなかった時代につくられた土木構造物は、ヒューマンサイズのかわいらしいものが少なくない。小規模ながら、地域の人々に求められ、大切に使われてきたインフラだ。たとえば、水を均等に分ける機構をもった「円筒分水」が生まれたことで長年の水争いが解消されたり、橋ができたことで対岸の鉄道駅を利用できるようになり、生活が劇的に豊かになったりする。こうした土木構造物のつむぐ物語が、私にはどうしようもなく愛（いと）おしい。私はこれを「ドボかわいい」、略して“ドボかわ”と呼んでいる。

取材する物件は、土木学会が認定する「選奨土木遺産」や、自治体などが公表する土木遺産のリストなどから、ドボかわアンテナに引っかかるものを選ぶ。そして、現地を訪れて実物に対面し、手で触れ、写真を撮り、図書館で郷土資料をひもとく。そうして見えてきた、その施設固有のかわいらしさを文章にしていく。

2017年４月号から始まった連載はすでに20回を超え、おかげさまで好評を博している。「建設業しんこうweb」にも転載されているので、ご興味のおありの方は、ご覧いただければ嬉しい。https://www.shinko-web.jp/

木造校舎風でドボかわいい「岩保木水門」

この連載をご縁として、昨年夏、私は釧路市建設業協会主催の講演会で話をさせていただく機会を得た。釧路を訪れるのはこのときが初めてだった。私はいつも、出張などで地方へ行くときには、周辺に土木遺産がないか調べるようにしている。そうして、私のドボかわアンテナがキャッチしたのが、「岩保木水門」だった。「岩保木」と書いて「いわぼっき」と読む。アイヌ語で「山の下」という意味だそうだ。

岩保木水門は、釧路市内を流れる釧路川と新釧路川の分岐点にある。雄大な釧路湿原の中にぽつんと佇む木造校舎のような外観がなんともドボかわいい。近づいてみると、校舎のように見えたのは、水門の上屋だった。本体は鉄筋コンクリート造の柱と梁、そして鉄製の門扉からなる。中央の柱には縦書きで「昭和六年八月竣功　岩保木水門」と書かれている。墨跡のような毛筆体がレトロな雰囲気だ。資料によれば、木造の上屋の中には、門扉を上げ下げするための巻揚機が４基格納されているという。

この水門は、特に横顔がフォトジェニックだ。本体の横に上屋へ上がるための階段が斜めに取り付けられ、その先には小さな木のドアが見えている。階段といい、上屋の切妻屋根といい、ちょっと見にはツリーハウスのようなのだ。

だが、こんなにドボかわいいにもかかわらず、聞いてみると岩保木水門の存在は釧路の人たちにさえ、そ

連載「かわいい土木」で紹介した岩保木水門。中央の柱に「昭和六年八月竣功　岩保木水門」とあり、90年近い年月を経ていることが分かる。

横から見ると、木造の上屋がツリーハウスのようにも見える。上屋の中には門扉を上下させるための巻揚機が格納されている。

岩保木水門の近くには、古いトラス橋の「鳥通橋」も遺っている。後ろには、新岩保木水門が見える。

れほど知られていないようだった。目の前が釧路湿原のカヌーポートになっており、私が訪れたときにもカヌー目当ての観光客が何人かいたが、残念なことに水門に関心を示しているようには見受けられなかった。岩保木水門は国土交通省、釧路湿原国立公園は環境省と管理者が異なるので無理もないが、現地に立つ国立公園の看板にも、水門についての説明はなかった。

ほぼ90年間にわたる「開かずの水門」

私が岩保木水門に注目した理由は、ビジュアルがかわいらしいというだけではない。この水門は、釧路地方の開拓の歴史を象徴する土木構造物でもあるからだ。

釧路市は、釧路川の河口に発展したまちだ。しかし、蛇行した流路は大雨のたびに洪水を起こし、人々を苦しめた。1920年（大正９年）、釧路市街地が未曾有の大洪水に襲われたのを受け、大規模な治水工事が計画された。釧路川を岩保木地点で分流し、延長11kmの放水路（新釧路川）を掘削。洪水時には釧路川を水門で遮断し、全流量を放水路へ流してまちを浸水から守る。一方で平時は水門を開けて、木材の流送や舟運に役立てるはずだった。

ところが、1930年10月に新釧路川が完成すると、分流によって釧路川下流の水位が下がり、船の航行が困難になってしまった。翌31年８月に水門が竣工した頃にはすでに、上流からの物資は新釧路川経由で釧路港へ運ばれるようになっていた。また同年には、舟運に代わって物流の主力となっていく鉄道路線、JR釧網本線も開通した。

釧路川下流を木材流送や舟運のルートとして使わないのであれば、常時水門を開けておく必要はない。むしろ、水門を開放していると、土砂が釧路川河口にある釧路港に流入、堆積するデメリットがある。

こうして岩保木水門は、完成してから一度も開くことなく、閉鎖したままの状態が続いた。1985年には老朽化に伴い、近くに新岩保木水門が建設されて流量調節の機能を移行。旧水門は完全に役割を終えた。

岩保木と太平洋を一直線に結ぶ新釧路川は、釧路川の河口から２kmほど西側で海へ注ぐ。その工事では国が、当時最新鋭だった掘削機「エキスカベーター」を導入して泥炭湿地の掘削を実施。また、コンクリート護岸工法を確立して、全国の先駆けとなった。

一連の治水事業が完了して以降、釧路市街地では浸水被害がほとんど発生していない。地域の発展に大きく寄与したとして、新釧路川は2014年度に土木学会選奨土木遺産に認定されている。

引退後のインフラに新たな役割を

もっとも、岩保木水門自体は選奨土木遺産の対象とはなっていない。文化財の指定や登録がなされているわけでもない。それでも、水門としての機能を失って

岩保木水門の眼前に広がる釧路湿原。釧路川の洪水時には、自然の貯水機能が役立つ。雄大な風景は、「治水」という切り口で岩保木水門や新釧路川とつながる。

釧路湿原は野生のタンチョウを見られるスポットとしても人気。「かわいい土木」とセットにすることで観光資源の魅力が高まる。

釧路市内の観光スポットの一つ、幣舞橋。下を流れる釧路川は、新岩保木水門で上流から遮断され、洪水のほとんどない安全な川になった。

から30年以上、ほぼそのままの姿で保存されている。これは素晴らしいことだと思う。

なぜならば、岩保木水門こそが、釧路のまちを水害から救った新釧路川開発のシンボルとなりうる構造物だからだ。岩保木から河口まで延長11.2kmに及ぶ新釧路川が「土木遺産である」と言われても、観光客をはじめとする他地域の人々には実感が湧かない。それよりも、水門という分かりやすい象徴を見せ、そこから新釧路川開発のストーリーを展開するほうが、訴求力があるはずだ。

釧路川の歴史を軸として語れば、その源である屈斜路湖、釧路湿原、岩保木水門、新釧路川、そして釧路川の河口に位置し、釧路市内の観光名所となっている幣舞（ぬさまい）橋などの“点”をつなぐ“面”が立ち上がってくる。観光による地域振興を考えるには、面になることで集客効果の拡大を図ることがポイントだ。

ただ、現役ではなくなった公共施設を保存し続けるには、コストの問題が発生する。このため、文化財的な価値を持つ建築物においては、従来の「凍結保存」から「活用保存」への展開が進みつつある。指一本触れずに遺すという厳格さを少し緩めて、リノベーションを施して新たな用途を与え、現役として使い続けるという発想だ。もちろん、凍結保存が適切な文化財もあるが、適材適所で柔軟な対応が望まれる。

土木構造物にも、この活用保存の考えに馴染みやすいものはあると思う。たとえば、官民連携によって岩保木水門の上屋をリノベーションし、民間事業者がカフェやレストランを運営するのはどうか。店内には古い巻揚機をそのまま展示し、木造校舎のような外観は残しつつ湿原側の窓は大きくして、眺望も楽しめるようにする。今でも、この場所で見る釧路湿原の夕日は、いわゆる“インスタばえ”として人気だという。外から眺めるだけでなく、水門施設の中を見学できたら、さらに興味を持たれるに違いない。

個人的には、水門として生まれながら、一度も門扉を開けられることのなかった岩保木水門に、ぜひとも歴史の証言者という別の活躍の場を与えてあげてほしい、とも願う。

「かわいい土木」の観光資源としてのポテンシャル

ここでは岩保木水門を中心に論じたが、こうした「かわいい土木」は全国各地に点在している。北海道にも未発掘の「お宝ドボク」が、まだまだ埋もれているかもしれない。

土木構造物を観光資源として見たときの最大の強みは、「ここにしかない」ことだ。土木構造物はほとんどがインフラ施設であるから、商業施設などに比べてそれがつくられた必然性が高く、社会性を持つ。つまり、その地域固有の歴史に深く関わっている。たとえば、古い水門は各地に遺っているが、釧路地方の開拓という文脈で語ることのできる水門は、岩保木水門しかないのだ。その意味では、公共物でなくとも「サイロ」なども観光資源としての魅力が十分ある。

さらに、構造物としての機能や造形の面白さも土木構造物の魅力だし、技術の進化過程を体現している点も外せない。実際に、ダムや橋梁（きょうりょう）などでは、そうした視点から見学する「インフラツーリズム」も盛んになってきている。

全国のかわいい土木は、観光資源として大きな可能性を秘めている。

釧路市内にわずかに遺る個人所有のサイロ。観光客にとっては「北海道らしさ」を体現する魅力的な構造物だ。

※後編は８月号の予定です。